

西田文学読書会(第42回) 2024.12.21 (13:45~15:45)
村上春樹「とんがり焼の盛衰」(第2回)
・佐野・岡部・槇谷・田中・奈原・大藤・本田・渡辺・安・趙・鹿
○第2回読書会予定 2024.12.21(土)(13:45~15:45)
○レポート締切予定 2025.1.18(土)
○第3回読書会予定 2025.1.25(土)(13:45~15:45)

『はじめての文学』村上春樹版/2006.12.10 文芸春秋

とんがり焼の盛衰

村上 春樹

ぼんやりと朝の新聞を眺めていたら、隅の方に「名菓とんがり焼・新製品募集・大説明会」という広告が載っていた。とんがり焼っていったい何のことなのかよくわからない。でも名菓とあるからにはやはり菓子なのだろう。僕は菓子についてはちょっとうるさい方である。それに暇だったから、とにかくその「大説明会」というのに顔を出してみることにした。

「大説明会」はホテルの広間で催され、お茶と菓子までついていた。菓子はもちろんとんがり焼である。僕はひとつまんでみたが、とくに感心する味ではなかった。甘さの質がねちねちとしていて、皮の部分ももつさりとしすぎている。今の若い人間がこんなものを好んで食べるとはとても思えない。

でも説明会に来ていたのは僕と同じくらいか、あるいはもつと年下の若い人ばかりだった。僕は952番という番号札をもらったが、まだあとから百人くらいは来たから、だいたい千人以上の人間がこの説明会に来たことになる。たいしたものだ。

僕の隣には二十歳くらいの度の強い眼鏡をかけた女の子が座っていた。美人ではないが、わりに性格の良さそうな女の子だ。

「ねえ、君はこれまでにとんがり焼って食べたことあった？」と僕は訊ねてみた。

「あたりまえじゃない」と女の子は言った。「だって有名ですもの」

「でもそんなに美味く……」と僕が言いかけたところで彼女が僕の足を蹴とばした。まわりの人間が僕の方をじろりと見た。嫌な雰囲気だ。でも僕は「熊のプー」のような無邪気な目をしてその場をやりすぎした。

「あなたってバカねえ」と少しあとで女の子がそつと耳うちした。「ここにきてとんがり焼の悪口なんか言ったら、とんがり焼につかまって生きては帰れないんだから」

「とんがり焼？」と僕はびつくりして叫んだ。「とんがり焼

つ……」

「し……」と女の子が言った。説明会が始まった。説明会ではまず「とんがり製菓」の社長がとんがり焼の歴史について話した。平安時代^[2]に誰か^{だれ}が何をしようとしたのがとんがり焼の原型であるとかいった類の真偽不明の話だ。古今和歌集にもとんがり焼についての和歌が入っているということである。おかしいから笑おうかとも思ったが、まわりの人間はみんな真剣そうな顔で聞き入っていたし、とんがり焼もこわいので結局笑わなかった。社長の説明はまる一時間つづいた。すごく退屈だった。

彼の言いたいことは要するに「とんがり焼は伝統のある菓子である」というだけのことなのだ。そんなの一行で済む。

それから専務が出てきて、とんがり焼新製品募集についての説明を行なった。長い歴史を誇る国民名菓とんがり焼もそれぞれの時代に即した新しい血を入れて弁証法的に発展していかねばならないとかいった説明だ。そういうと聞かえはいいが、要するにとんがり焼の味が古くさくなつて売上げが落ちてきたので若い人のアイデアが欲しいということである。それならそうとはつきり言えればいいのだ。

帰りに募集要綱をもらった。とんがり焼をベースにした菓子を作つて1カ月後に持参すること、賞金は二百万円、とある。二百万円あれば恋人と結婚して、新しいアパートに移ることができる。それで僕は新とんがり焼を作ることにした。

前にも言ったように、僕は菓子についてはちょっとうるさい。あんこやクリームやパイの皮なんか、どんな風にも作ることができる。一カ月に新しい現代的なとんがり焼を作り出すくらい簡単である。僕は締切の日^{めきぎ}に新とんがり焼を二ダース作り、とんがり製菓の受付に持っていった。

「おいしそうねえ」と受付の女の子がにっこりほほえんで言った。

「おいしいよ」と僕は言った。

*

その一カ月後にとんがり製菓から明日会社においてほしいという電話がかかってきた。僕はネクタイをしめてとんがり製菓にでかけた。そして応接室で専務と話をした。

「あなたの応募された新とんがり焼は社内でもなかなか好評であります」と専務が言った。「なかでも、あ——、若い層に評判がよろしい」

「それはどうも」と僕は言った。

「しかし一方ですな、ん——、年配のものの中には、これではとんがり焼ではない^[4]と申すものもおりますすな、ま、甲論乙駁という状況でありますな」

「はあ」と僕は言った。いったい何か言いたいのかさっぱりわからない。

「で、この際とんがり鴉さまの御意見をうかがおうではないかと、重役会議で決定致しましたのであります」

「とんがり鴉！」と僕は言った。「とんがり鴉というのはいつい何のことでしょうか？」

専務はわけがわからないといった顔をして僕を見た。「あなたはとんがり鴉さまのことも知らずに、このコンクールに応募されたのですか？」

「申しわけありません。どうも世事に疎いもので」

「困りましたな」と言つて専務は首を振つた。「とんがり鴉さまのことも御存知ないというのは……でも、ま、よろしゅうござんす。私のあとについていらつしやい」

僕は彼のあとについて部屋を出て、廊下を歩き、エレベーターで六階に上り、それからまた廊下を歩いた。廊下のつきあたりには大きな鉄の扉があった。プザーを押すとがしりとした体格の守衛が出てきて、相手が専務であることを確認してから扉の鍵を開けた。なかなか警戒が厳重だ。

5

「この中にとんがり鴉さまがいらつしやいます」と専務が言った。「とんがり鴉というのは昔々からとんがり焼だけを食して生きておる特殊な鴉の一族であります……」

それ以上の説明は不要だった。部屋の中には百羽以上の数の鴉がいた。高さ五メートルくらいのがらんとした倉庫みたいな部屋に何本もの横棒が渡され、そこにとんがり鴉がずらりと並んで座つていた。とんがり鴉は普通の鴉よりずっと大きく、大きなもので体長一メートルくらいあった。小さいものでも六十センチくらいはある。よく見ると彼らには目がなかった。目のあるべき場所には白い脂肪の塊りがくっついていただけだ。おまけに体ははちきれんばかりにむくんでいる。部屋の中はうす暗く、いやなおいがした。

僕たちが中に入った音を聞きつけるととんがり鴉たちはばたばたと羽ばたきをしながら一斉に何かを叫びはじめた。最初のうちはただの轟音にしか聞こえなかったが、やがて耳が馴れてくると彼らがみんな「とんがり焼・とんがり焼」と叫んでいるらしいことがわかった。見るからにおぞましい動物だ。

専務が手に持っていた箱の中からとんがり焼を出して床に撒くと、百羽のとんがり鴉たちが一斉にそれにとびかかった。そしてとんがり焼を求めて互いの足にくらいつき、目をつつきあつた。やれやれ、これじゃたしかに目が失くなつてしまふわけだ。

その次に専務はさつきとは違うべつの箱から、とんがり

焼に似た菓子を取りだしてばらばらと床に撒いた。「よござんすか、これはとんがり焼コンクールで落選したものです」鴉たちは前と同じようにそれに群がったが、それがとんがり焼でないことがわかるとそれを吐き捨て、口ぐちに怒りの声をあげた。

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

と彼らは大声で叫んだ。その声为天井に反響して、耳の奥が痛くなるほどだった。

「ほらね、本物のとんがり焼しか食べないんです」と得意そうに言った。「偽物だと口もつけないんです」

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

「じゃ、こんどはあなたのお作りになった新とんがり焼を撒いてみましょう。食べれば入選、食べなければ落選です」大丈夫かな、と僕は不安になった。「そんなことして大丈夫なんですか？」と僕は専務にたずねてみた。なんだかすごく不吉な予感がしたからだ。だいたいこんないい加減な

連中に食べさせてみて当落を決めるなんてすごく変な話だ。もつとまともな選り方があるはずなのだ。しかし専務は僕の不安にはおかないしに、僕が応募した「新とんがり焼」を景気よく床に撒いた。鴉たちはまたそれに群がった。それから混乱が始まった。ある鴉は満足してそれを食べ、ある鴉はそれを吐き出してとんがり焼！ とどなった。次にそれにありつくことができなかった鴉が興奮して、それを食べた鴉の喉笛をくちばしで突いた。血が飛び散った。べつの鴉が誰かが吐き出した菓子にとびついたが、とんがり焼！ と叫んでいた巨大な鴉に捕まって腹を裂かれた。そんな具合に乱闘が始まった。血が血を呼び、憎しみが憎しみを呼んだ。たかが菓子のことなだけけれど、鴉たちにとってはそれが全てなのだ。それがとんがり焼であるか非とんがり焼であるか、それだけが生存をかけた問題なのだ。

6

「ほらごらんさい」と僕は専務に言った。「急にあんなに撒いちやうものだから刺激が強すぎたんですよ」

それから僕は一人で部屋を出て、エレベーターで下に降り、とんがり製菓の建物を出た。賞金の二百万円は惜しかったけれど、この先の長い人生をあんな奇妙な鴉たちの相手しながら生きていくのはごめんだ。

僕は自分の食べたいものだけを作つて、自分で食べる。鴉なんかいつまでもお互いにつつきあつていればいいんだ。

【第一回討論の記録】

①語り手(「僕」)作者・小説家

②伝統的権威者(「とんがり鴉」)評論家、学者

③一般読者(「若い人」)

④「とんがり焼き」「文学」の寓意とは何か

佐野：宗教とかイデオロギー、伝統、権威によって成り立つ何か？ 若い人がどう受け取っていくか？

大藤：「これは小説か小説ではないか」という問題？

新しい授業を問われて、授業が授業じゃないかが問題となり、研究者の場合論文か論文じゃないかが問題。

榎谷：「春の祭典」のように、新しすぎると受け取り手が受け止めきれない。歴史の中に新しいものが登場してきたときの反応だが、自分の気持ちに忠実に作りたいのが芸術家。

渡辺：これは村上春樹自身の経験を書いたもので、とんがり焼き＝純文学、とんがり鴉＝文壇に巣くう評論家、作家という寓話ではないか。

奈原：菓子業界では新しい時代に生きて行くため、伝統にとらわれずに新しいブランドを作る。伝統と革新をテーマにした作品。

岡部：文壇批判が定説。とんがり焼きは自分流でいいんだというのが僕の姿勢が受け入れられる。

佐野：宗教的イデオロギー的権威がすべての根本にある。人間が社会を作っている限り、そうならざるを得ないが、僕は自分のやりたいようにやる。

榎谷：現代発信が簡単になったから、僕流の生き方が受け入れやすいようになった。鴉の描写は醜く怖い。神の使いお告げとしての鴉だが、会社の自由にならないという二面性が込められている。

佐野：若い人が生きて行くこうとするなら、鴉の意向は無視できない。権威に認められなければ、生きていけない。

岡部：これは本当の権威か？権威とは文芸春秋が売り上げを揚げたいために、やっていることに過ぎない。

佐野：審査する人は本気のはずだ。

榎谷：「会社の中でしか通用しない評価」と「僕は自分の好みで生きる」の二項対立にとどまると思う。

岡部：若い人は本当には茶川賞がそれほど関心事はない。

榎谷：現代、たくさん売れたら正義という感じがある。

佐野：とんがり焼きとは何かと本気で追及する人は必要ではないのか？

榎谷：それが衰退してきているのではないか？

岡部：今は衰えてきている。

奈原：最後の一行はうら寂しい感じがある。超孤独。賞が欲しいという低次元の名誉欲の後味の悪さを感じる。

榎谷：後味の悪さ、突き放したような感じ。お菓子だから

好きなものを作って食べればよいが、それは素人だからよいので、文学のつもりで書いているのなら広がらない。

榎谷：ぼくは、新しいとんがり焼きに関心がなくなった。新しいものを作ると、鴉たちが審査する。

佐野：お菓子を作るのは得意だが。

奈原：おたくの自己満足だから、市場に受けなくて構わない。僕のとんがり焼きは古いコンセプトを超えない。

岡部：自分流でいいのか？ 応募した後で審査員に馬鹿野郎といい、俺流というのは落ちたことへの負け惜しみ。

大藤：どのレベルで折り合いをつけたらいいのか？僕は今よりおいしいものを作ろうとしたのに、鴉が二択で争っているのに失望した。どこで折り合いをつけるかが問題だ。

奈原：教祖の枠を逸脱するかどうか問題。

大藤：新しいものに対し、鴉はそれがとんがり焼きかどうかで採れる。新しいものが求められても、新しすぎたらだれも受け入れてくれない。どこで折り合いをつけるか。

佐野：自分が書きたいことがあるのと、誰に読んでもらいたいかの問題があると思う。

奈原：僕は良いものを作ったという思いがあったのに、うまくいかなかった。

榎谷：おいしいかどうか、とんがり焼きかどうかという二つの評価軸がある。僕はおいしいものができたと思ったが、鴉はとんがり焼きかどうかを問題にしている。ぼくは一般読者の関心に立っているが、それが俺基準でしかなく、鴉の関心には読者は関心が入っていない。

佐野：僕の味覚と一般の人の味覚は一応区別している。同一視はしていない。

大藤：最初は若い人に届くようにと思って作っていたが、後には一般人に受け入れられるようにと変わっていった。

佐野：まず自分が楽しいと思わないと書けない。

榎谷：楽しかったものが通る。

大藤：ある人々に自分の描いたものを届ける場合にどう考えたらよいか？ 何が肝になって来るのか。

榎谷：後味の悪さは、一般人の反応が書かれていない。届けたいと思ってきた人に届けるのがポジティブな対応だ。

佐野：どのみち他人は理解して呉れない。論文を手にとってくれる人に対して情理を尽くして書いていく。

岡部：読者に受け入れられるものに、自分でなければという部分を必ず少しだけ入れる。100パーセント自分の思う事を書くというのではだめ。

大藤：どこまで割り切るのか、先生に分かってもらおうとするのだが、やりとりはどういう形でなされるのか？

岡部：とんがり鴉への調査がないのが問題ではないか。

大藤：お菓子の領域に対する価値判断がそもそもあるのか？ とんがり鴉の基準に合わせる必要があるか？ とん

がり焼きとは何か？ お菓子って何か？ 人間は問題にど

う向き合ったらいいか、これらの問題に真摯に向き合う。

・佐野：事柄に応答する時、そこに他者の問題が開かれないか？ 最後の二行も、他者に開かれているというべきではないか。

・楠谷：受付のお姉さんととんがり鴉のどっちを上位に置いているかという問題。それは自分の問題意識と呼応する問題。自分がとんがり焼の本質に興味を持つことで道が開けるのかもしれない。とんがり焼きたらしめている特徴だけは残して、複数の価値の組み合わせでできている。

・大藤：応答する時には人との間には共通性が必ずどこかにある。

・佐野：応答するとは我を忘れて受け取っている、開かれている。経験を伝えなくなる。自分は破られ、出来事は現れるという広さを持っている。出来事との出会い。鴉は自分に閉じているのであって、それに関わることはないだろう。わかっているという事の破れを通してしか出会いはない。

・田中克典さん

今日の文学読書会ですが、再度欠席とさせていただきます。最近土曜の午後に抜けられない用務が重なることが多くなりました。テキスト「とんがり焼の盛衰」何度も読み直しています。主人公の「僕は、どんな状況にいるのか？就職活動中？失業中？職場でのトラブルを抱えて悶々としているのか？最後の一文「僕は食べたいものだけを作って自分で食べる。鴉なんかいつまでもお互いにつつきあっていたらいいんだ」に込められた思いをどう読み取るか？「僕」のこれまでの「生」のあり様が映し出されているような気がします。鴉、とんがり焼は何を象徴しているのか。これまでの「生」の中で、自分なりに大切だと思っていた「人」「事」の象徴のような気がします。2000年代初頭の日本の若者が抱えていた社会との関わりへの悶々とした思いをテーマにしているのか。さらに考えて、なんとかレポートが出来たらと思っています。宜しくお願い致します。

【第一回討論】

◎「とんがり焼の盛衰」が作家の立場から芸術創作を扱う小説であるとするれば、4つの着眼点があるという考え。

- ① 作者・語り手(「僕」)の感性、価値観と創作姿勢。
- ② 研究者、教師権威者(「とんがり鴉」)の評価と価値づけ。
- ③ 一般読者(若い人)の評価、評判。
- ④ 「とんがり焼き(文学)とは何か」という問い。

【第一回討論の柱】

◎芸術創作と鑑賞における①②③④の三つの価値づけについて、「この小説はどのように描いているか。その描き方を、読者としてどう評価するか。

・渡辺・読者批判。「ノックル説明会の若い女性は権威を頼りにし、それに縋ってきている」という批判。とんがりガラスへの批判もあるが。

・趙・ストーリーとしては僕は権威ある社会の世界のルールが分からない。権威者の権威を認めない。ぼくは自分のありのままが良い。趙さんから言えば、これは他者との出会いではないか。他者とは出会わなかった僕の話ではないか。とんがり焼き、とんがり鴉の世界を僕は知らない。おいしいと思わないのに、みんなは情熱を燃やしてそこに参加している。ぼくにはわからない。僕はほんとのとんがり焼きを作ろうとは思っていない。本物が偽物かは趙さんには気になるが、ぼくは自分がおいしいとんがり焼きかどうかにか関心がない。200万円にしか興味がない。自分には自信を持っている。違う世界に出会う直前まで行って、しかし出会わなかった。僕の新作のお菓子は偽物として否定されたのではなく、本物がどうかはわからない状態で終わっている。僕はその状態で諦めて帰って来るのは、その結果に向かい合う勇気がないからか？ ぼくは自信満々だから、出せば200万円もうう自信があった。カラスのもめごとに対する僕の冷たい反応を見ると、趙さんが他の学会に聴講に行くときのような気がする。僕の失望、諦めの本当の理由は何か？ 負けず嫌いか？ 負け惜しみ？

・本田・主体性、「主体的に堂々力を伸ばす」授業のナンセンスさを感じた。とんがり鴉の意見で評価が決まるのは、主人公は得体のしれないとんがり鴉の基音がはっきりしないことに怒っている。食べる鴉もおり、食べない鴉もいた。僕の体制批判、権威批判が現れている。とんがり鴉が食べるか食べないかで評価が決まる。現代の「ミニミッド」構造への批判。若い人とは伝統とか権力に染まっていない人。若い人に受ける大ベストセラーになる可能性もあった。とんがり鴉が死んでいるから、自分のとんがり焼きが評価される道もあり得たという考え。雑に時いたからこうなったという怒り。僕は主体的に取り組んだのだが、電灯的権威に敗れたという話。主体性とは何かが難しい。彼は賞金競争から降りて、おいしいものを作ることに戻る。結末は、負け惜しみでなく、決意表明。自分のおいしさを求めている。奈原・みえみえの文学賞のメタファー。僕は無意味だと言っているが、第三者から見ると極論を言えば、売ればいいのだ。閉鎖的な芥川賞の審査委員ロールのカリスマが自分の劣情によって価値ある作家の生命を殺す。出版社の

販売戦略の一環で、審査員筆が書き物としてあると思うのだが、その筆筆があたかも官僚文法のようなフィルターになって膨大な作品を振り落として、残ったモノを何点かをカリスマが審査する。幾重もの業界利益と文学の大物のプライドに基づいた縄張りに対する僕の恨みつらみが描かれている。第三者から見れば、村上春樹からすれば、文学賞はもつと必要がない。なぜなら、彼の小説はそれだけ売れているからだ。市場の評価は、どんなカリスマの審査より、業界の審査員筆を超えた「みえざる神の手」の結果と思う。何ら問題がないのではないか。しかし、こんな見え見えの小説を書くという事は、本人は未練があり、負け惜しみがあるのが不思議だと思つ。獺祭の社長が業績が伸びた後も恨みつらみを言い続けており、今となっては酒の本質を問う方向に考えてもよいのではないかと思つ。

・榎合・獺祭の味はよくわからなくても、プーチンが飲んだというだけで有名(東洋美人)、権威のある人が賞を与えるという事なしに、一般人は物の価値が分からない、そのことへの揶揄。判断をしているのが最悪な者達だったという皮肉の暴露。「いつのはあちこちにある。音楽演奏家にもそういう事はある。「コンクール受賞歴と、ほんとに優れた人は「コンクール」にでる必要がない。一般人に必要なお墨付き。今回思つたのは、村上春樹」たかがお菓子と「たかが文学」を見ているということ。そういう事で乱闘するってバカだねという思い。村上春樹の肩の力が抜けた客観的な見方。一歩引いたような見方。負け惜しみかどうかと言えは、そついわれかねないやうなところもあるが、「たかがお菓子」と「たかが文学」によつて、自分の自由を奪われるのはばかばかしいという気持ち強い。鴉が化け物のように描かれるのは、その「距離感」の違いから来ている。村上春樹はそれを全否定しているわけではないが、どこからそういう思つたのかは不思議。僕もお菓子を作っており、ぼくは起つている。あ、わかつている。

・審査員が鴉であるという点。
・息気よく床にまいた「大事に扱っていない」「ぞんざいに扱われた」という感じ。人が食べておいしいと思つてもらいたいのには、雑に扱われた。本当に丁寧な扱う方法があったらどうのは、どういふ事かはなにか。

・新しい作品も小出しにこつこつとこつこつと出されてもつと方法もあるかもしれない。「一気に入然出て来たので、騒ぎになつてしまふ」。

・芥川賞の審査員は動物園のような扱い。見ていてさう思う。見ていて鴉には共感がある。

・趙才応募する目的は200万円の賞金だが、新聞を見てお菓子造りに自信を持つているから応募しようとした。本音はお菓子の腕を見せたかった。鴉にお菓子を嗜む時の不安

は何か？

「僕が急に時いちゃうものだから」が気になっている。

・岡部・獺祭の始めを知っている人間からすれば、最後が負け惜しみに読めるのがリアリティであると思つ。世間的に見たら、「これはそんなものだろう」。200万円とる言つたらとらなきゃだめ。見切りが甘かった。この主人公はこれからの「下」。「これが本当にある程度の水準を超えてしまつたら、200万円を取らさう。だから、鴉が騒ぐというのは、ぼくの作品がその程度のモノだったという事だ。だから、ぼくは認められたのだらう。自分の世界を自分で追及してきたのだが、それを認められたいという気持ちがあつたのがにじんでいるのがリアリティ。この作品を文学の寓意と見たら、結局この出来事によつて主体性を獲得した。おそろしく、お菓子作りに関して、カステラが上手に焼けるとか腕の磨き方をしてくて、たいていのモノなら作れますというのには、本当の主体性じゃない。そこはまだ、そこにまだ無自覚なところがあるのが描かれていると思つ。それが、人の手にわたつて、思つたような評価が得られなかったことで、はじめて自分が主体的にも書くことという地点に立てたのだと思つ。この出来事の前と後では、ぼく自身が変わり、自分の自覚が出て来て、主体的になれたと思つ。

・大藤・お菓子にどう向き合つか。作り手、専門家、食べる人どつこつかかわるか。僕が向き合つていたのは、「たかがお菓子」に着目する「この小説の僕は、人生にどういふ新しいものを生み出すか」といふ問題に向き合つていたのだと思つよつになつた。「これまでどんがり焼きでは出せなかった味を出したいと思つた。そこでどんがり鴉に評価される」となると、新しいものを見分けることが課題となるのは仕方がない。どんがり鴉は新しい何かが現れていたとして、そもそもそれに気づけない。自分がどんがり焼きと信じている者には、がみつへくしかない。すでに出来上がったものを基準に、新しいものに向き合つていかな。「こ」からどう考えたらいのかが難しい。僕と会社の人たちの関係は、判断のシステムから逃れているように見えて、どんがり鴉に判断されるということではない可能性を見出されるように感じる。判断する、わかれる、こつこつと出さなへ、一緒に

お菓子の問題に向き合つ、味を求めたいとどういふありかたをどう考えたらいいのかなと思つ。判断せず、「さういふ問題」に向かうのは、どうすればよいか。
・岡部・審査員が矮小化されている時代遅れで頭が古い人たちといふのが気になるのだが、「これも文学界で自分自身で戦ってきた人たちではないだろつか。十分に広い視野を持った人たちではないか。大藤さんの意見では、「ミニミニ」二ヶーションを求めていたようにも聞こえたが、200万

田としてつまえはいいのじゃないは矛盾しているように聞
くね。

・大藤・とんがり鴉はとんがり焼きとは何かの自分自身の
判断基準を作って、今まで生み出されたとんがり焼きを基
準にして、その範囲内で味わう味わい方をしてしまってい
るのを、ぼくは貧しいと思っているのは、それ以外の可能性
をなくしてしまっからだ。そこに対して僕は違うんじゃない
かと思ってるのではないか。

・岡部・すく面田というコンセプトを発表したら賞に入る、そうい
う応募の仕方もある。賞は一つの道筋であり、そこにしか
次にあるモノを見つけた道がないと思う方に問題がある
のではないか？この小説の僕は、それまでの頭の中の物
差しでは測れない者に気づいた。お菓子の文脈の中で次の
いいものと、みんながまったく思ってもいなかった次のモノ
がある。

・大藤・味わうという事の中でお菓子を作ることに向き合
う、その景色を大事にする。味わうということでは、同じ
パラダイムから逃れられない。

・岡部・そこでは共有しているとお藤さんが思っているのは
えらいね。

・奈原・創造的破壊と言われる商品開発は、既存の要素の単
なる組み換えでも市場に迎えられるというのはよくある。
我々の生き方、伝統的しきたり、枠組みに支配されないと、
次の創造という事はあり得ない。まず、伝統、しきたりに
徹底的に迎合すべきであって、そこで滲み出る者が個性で
ある。自分の好きなのは「金庫」。

とんがり焼の盛衰

村上 春樹

「ぼんやりと朝の新聞を眺めていたら、隅の方に「名菓とんがり焼・新製品募集・大説明会」という広告が載っていた。とんがり焼っていったい何のことなのかよくわからないう。でも名菓とあるからにはやはり菓子なのだろう。僕は菓子についてはちよつとうるさい方である。それに暇だったから、とにかくその「大説明会」というのに顔を出してみることにした。

「大説明会」はホテルの広間で催され、お茶と菓子までついていた。菓子はもちろんとんがり焼である。僕はひとつまんでみたが、とくに感心する味ではなかった。甘さの質がねちねちとしていて、皮の部分もつさりとしすぎている。今の若い人間がこんなものを好んで食べるとはとても思えない。

でも説明会に来ていたのは僕と同じくらいか、あるいはもつと年下の若い人ばかりだった。僕は952番という番号札をもらったが、まだあとから百人くらいは来たから、だいたい千人以上の人間がこの説明会に来たことになる。たいしたものだ。

僕の隣には二十歳くらいの度の強い眼鏡をかけた女の子が座っていた。美人ではないが、わりに性格の良さそうな女の子だ。

「ねえ、君はこれまでにとんがり焼って食べたことあった？」と僕は訊ねてみた。

「あたりまえじゃない」と女の子は言った。「だって有名ですもの」

「でもそんなに美味く……」と僕が言いかけたところで彼女が僕の足を蹴とばした。まわりの人間が僕の方をじろりと見た。嫌な雰囲気だ。でも僕は「熊のプー」のような無邪気な目をしてその場をやりすごした。

「あなたってバカねえ」と少しあとで女の子がそつと耳うちした。「ここにきてとんがり焼の悪口なんか言ったら、とんがり焼につかまって生きては帰れないんだから」

「とんがり焼？」と僕はびつくりして叫んだ。「とんがり焼って……」

「し——っ」と女の子が言った。説明会が始まった。

説明会ではまず「とんがり製菓」の社長がとんがり焼の歴史について話した。平安時代12に誰が何をしてこうなったのがとんがり焼の原型であるとかいった類の真偽不明の話だ。古今和歌集にもとんがり焼についての和歌が入っているということである。おかしいから笑おうかとも思

ったが、まわりの人間はみんな真剣そうな顔で聞き入っていたし、とんがり焼もこわいので結局笑わなかった。社長の説明はまる一時間つづいた。すぐく退屈たいくつだった。彼の言いたいことは要するに「とんがり焼は伝統のある菓子である」というだけのことなのだ。そんなの一行で済む。

それから専務が出てきて、とんがり焼新製品募集についての説明を行なった。長い歴史を誇る国民名菓とんがり焼もそれぞれの時代に即した新しい血を入れて弁証法的に発展していかねばならないとかいった説明だ。そういうと聞きえはいいが、要するにとんがり焼の味が古くさくなつて売上げが落ちてきたので若い人のアイデアが欲しいということである。それならそうとはつきり言えればいいのだ。

帰りに募集要綱をもらった。とんがり焼をベースにした菓子を作つて1カ月後に持参すること、賞金は二百万円、とある。二百万円あれば恋人と結婚して、新しいアパートに移ることができる。それで僕は新とんがり焼を作ることにした。

前にも言ったように、僕は菓子についてはちよつとうるさい。あんこやクリームやパイの皮なんか、どんな風にも作ることができる。一カ月に新しい現代的なとんがり焼を作り出すくらい簡単である。僕は締切の日あきぎりに新とんがり焼を二ダース作り、とんがり製菓の受付に持っていった。

「おいしそうねえ」と受付の女の子が13こりほほえんで言った。

「おいしいよ」と僕は言った。

*

その一カ月後にとんがり製菓から明日会社においてほしいという電話がかかってきた。僕はネクタイをしめてとんがり製菓にでかけた。そして応接室で専務と話をした。「あなたの応募された新とんがり焼は社内でもなかなか好評であります」と専務が言った。「なかでも、あ——、若い層に評判がよろしい」

「それはどうも」と僕は言った。「しかし一方ですな、ん——、年配のものの中には、これではとんがり焼ではない14と申すものもおりましてですな、ま、甲論乙駁という状況でありますな」

「はあ」と僕は言った。いったい何か言いたいのかさっぱりわからない。

「で、この際にとんがり焼さまの御意見をうかがおうではないかと、重役会議で決定致しましたのであります」

「とんがり焼！」と僕は言った。「とんがり焼というのはいったい何のことでしょうか？」

専務はわけがわからないといった顔をして僕を見た。「あ

なたはとんがり鴉さまのことも知らずに、このコンクールに応募されたのですか？」

「申しわけありません。どうも世事に疎いもので」

「困りましたな」と言つて専務は首を振つた。「とんがり鴉さまのことも御存知ないというのは……でも、ま、よろしゅうござんす。私のあとについていらつしやい」

僕は彼のあとについて部屋を出て、廊下を歩き、エレベーターで六階に上り、それからまた廊下を歩いた。廊下のつきあたりに大きな鉄の扉があった。プザーを押すとがっしりとした体格の守衛が出てきて、相手が専務であることを確認してから扉の鍵を開けた。なかなか**嚴重な警戒下**であることを警戒が**嚴重だ**。

「この中にとんがり鴉さまがいらつしやいます」と専務が言った。「とんがり鴉というのは昔々からとんがり焼だけを食して生きておる特殊な鴉の一族であります……」

それ以上の説明は不要だった。部屋の中には百羽以上の数の鴉がいた。高さ五メートルくらいのがらんとした倉庫みたいな部屋に何本もの横棒が渡され、そこにとんがり鴉がずらりと並んで座っていた。とんがり鴉は普通の鴉よりずっと大きく、大きなもので体長一メートルくらいあった。小さいものでも六十センチくらいはある。よく見ると彼らには目がなかった。目のあるべき場所には白い脂肪の**小たまり塊**りがくつついているだけだ。おまけに体ははちきれんばかりにむくんでいる。**部屋の中はうす暗く、いやなおい**がした。

僕たちが中に入った音を聞きつけるととんがり鴉たちはばたばたと羽ばたきをしながら一斉に何かを叫びはじめた。最初のうちはただの轟音にしか聞こえなかったが、やがて耳が馴れてくると彼らがみんなで「とんがり焼・とんがり焼」と叫んでいるらしいことがわかった。見るからにおぞましい動物だ。

専務が手に持っていた箱の中からとんがり焼を出して床に撒くと、百羽のとんがり**鴉**たちが一斉にそれにとびかかった。そしてとんがり焼を求めて互いの足にくらいつき、目をつつきあつた。やれやれ、これじゃたしかに目が失くなつてしまふわけだ。

その次に専務はさつきとは違うべつの箱から、とんがり焼に似た菓子を取りだしてばらばらと床に撒いた。「よござんすか、これはとんがり焼コンクールで落選したものです」

鴉たちは前と同じようにそれに群がったが、それがとんがり焼でないことがわかるとそれを吐き捨て、口ぐちに怒りの声をあげた。

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

と彼らは大声で叫んだ。その声为天井に反響して、耳の奥が痛くなるほどだった。

「ほらね、本物のとんがり焼しか食べないんです」と得意そうに言った。「偽物だと口もつけないんです」

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

「じゃ、こんどはあなたのお作りになった新とんがり焼を撒いてみましょう。食べれば入選、食べなければ落選です」

大丈夫かな、と僕は不安になった。「そんなことして大丈夫なんですか？」と僕は専務にたずねてみた。なんだかす

ごく不吉な予感がしたからだ。だいたいこんないい加減な連中に食べさせてみて当落を決めるなんて**間違つていあすごく変な話だ**。もつとまともな**選り方があるはずなのだ**。

しかし専務は僕の**患惑不安**にはおかまいなしに、僕が応募した「新とんがり焼」を景気よく床に撒いた。鴉たちはまたそれに群がった。それから混乱が始まった。ある鴉は満足してそれを食べ、ある鴉はそれを吐き出してとんがり焼！ とどなった。次にそれにありつくことができなかった鴉が興奮して、それを食べた鴉の喉笛をくちばしで突いた。血が飛び散つた。べつの鴉が誰かが吐き出した菓子にとびついたが、とんがり焼！ と叫んでいた巨大な鴉に捕まって腹を裂かれた。そんな具合に乱闘が始まった。血が

血を呼び、憎しみが憎しみを呼んだ。たかが菓子のことなのだけれど、鴉たちにとってはそれが全てなのだ。それがとんがり焼であるか非とんがり焼であるか、それだけが生存をかけた問題なのだ。

「ほらごらんさい」と僕は専務に言った。「急にあんなに撒いちやうものだから刺激が強すぎたんですよ」

それから僕は一人で部屋を出て、エレベーターで下に降り、とんがり製菓の建物を出た。賞金の二百万円は惜しかったけれど、この先の長い人生をあんな**奇妙な鴉**たちの相手をしながら生きていく**なんてまわびりだのはごめんだ**。

僕は自分の食べたいものだけを作って、自分で食べる。鴉なんか**いつまでもお互いにつつきあつて死んでしまえ**ば**いれ**ばいいんだ。

とんがり焼の盛衰

村上 春樹

131

ぼんやりと朝の新聞を眺めていたら、隅の方に「名菓とんがり焼・新製品募集・大説明会」という広告が載っていた。とんがり焼についていったい何のことなのかよくわからない。でも名菓とあるからにはやはり菓子なのだろう。僕は菓子についてはちよつとうるさい方である。それに暇だったから、とにかくその「大説明会」というのに顔を出してみることにした。

「大説明会」はホテルの広間で催され、お茶と菓子までついていた。菓子はもちろんとんがり焼である。僕はひとつまんでみたが、とくに感心する味ではなかった。甘さの質がねちねちとしていて、**小わ皮**の部分ももつさりとしすぎている。今の若い人間がこんなものを好んで食べるはとても思えない。

でも説明会に来ていたのは僕と同じくらいか、あるいはもっと年下の若い人ばかりだった。僕は952番という番号札をもらったが、まだあとから百人くらいは来たから、だいたい千人以上の人間がこの説明会に来たことになる。たいしたものだ。

僕の隣には二十歳くらいの度の強い眼鏡をかけた女の子が座っていた。美人ではないが、わりに性格の良さそうな女の子だ。

「ねえ、君はこれまでにとんがり焼って食べたことあった？」と僕は訊ねてみた。

「あたりまえじゃない」と女の子は言った。「だって有名で、すもの」

「でもそんなに美味く……」と僕が言いかけたところで彼女が僕の足を蹴とばした。まわりの人間が僕の**132**方を見ろりと見た。嫌な雰囲気だ。でも僕は「熊のプー」のような無邪気な目をしてその場をやりすぎした。

「あなたってバカねえ」と少しあとで女の子がそつと耳うちした。「ここにきてとんがり焼の悪口なんか言ったら、とんがり焼につかまって生きては帰れないんだから」

「とんがり焼？」と僕はびつくりして叫んだ。「とんがり焼って……」

「し——っ」と女の子が言った。説明会が始まった。説明会ではまず「とんがり製菓」の社長がとんがり焼の歴史について話した。平安時代に誰が何をしてこうなったのがとんがり焼の原型であるとかいった類の真偽不明の話だ。古今和歌集にもとんがり焼についての和歌が入っているということである。おかしいから笑おうかとも思ったが、まわりの人間はみんな真剣そうな顔で聞き入っていたし、

とんがり焼もこわいので結局笑わなかった。

社長の説明はまる一時間つづいた。すぐく退屈だった。彼の言いたいことは要するに「とんがり焼は伝統のある菓子である」というだけのことなのだ。そんなの一行で済む。

それから専務が出てきて、とんがり焼新製品募集についての説明を行なった。長い歴史を誇る国民名菓とんがり焼もそれぞれの時代に即した新しい血を入れて弁証法的に発展していかなければならないとかいった説明だ。そういうと聞こえはいいが、要するにとんがり焼の味が古くさくなって売上げが落ちてきたので若い人のアイデアが欲しいということである。それならそうとはつきり言えはいいのだ。

帰りに募集要**項綱**をもらった。とんがり焼をベースにした菓子を作って1カ月後に持参すること、賞金は二百万円とある。二百万円あれば恋人と結婚して、新しいアパートに移ることができる。それで僕は新とんがり焼を作ることにした。

前にも言ったように、僕は菓子についてはちよつとうるさい。あんこやクリームやパイの**小わ皮**なんか、ど**133**んな風にも作ることができる。一カ月で新しい現代的なとんがり焼を作り出すくらい簡単である。僕は**木締切**の日に新とんがり焼をニダース作り、とんがり製菓の受付に持っていった。

「おいしそうねえ」と受付の女の子が言った。

「おいしいよ」と僕は言った。

*

その一カ月後にとんがり製菓から明日会社においてほしいという電話がかかってきた。僕はネクタイをしめてとんがり製菓にかけた。そして応接室で専務と話をした。

「あなたの応募された新とんがり焼は社内でもなかなか好評であります」と専務が言った。「なかでも、あ——、若い層に評判がよろしい」

「それはどうも」と僕は言った。
「しかし一方でですな、ん——、年配のものの中には、これではとんがり焼ではないと申すものもおりましてですな、ま、甲論乙駁という状況でありますな」

「はあ」と僕は言った。いったい何か言いたいのかさっぱりわからない。

「で、この際にとんがり焼さまの御意見をうかがおうではないかと、重役会議で決定致しましたのであります」

「とんがり焼！」と僕は言った。「とんがり焼というのはいったい何のことでしょうか？」

専務はわけがわからないといった顔をして僕を見た。「あなたはおとんがり焼さまのことも知らずに、このコンクールに応募されたのですか？」

「申しわけありません。どうも世事に疎いもので」**134**

「困りましたな」と言つて専務は首を振つた。「とんがり鴉さまのことも御存知ないというのは。……でも、ま、よろしゅうござんす。私のあとについていらつしやい」

僕は彼の**後あと**について部屋を出て、廊下を歩き、エレベーターで六階に上り、それからまた廊下を歩いた。廊下のつきあたりに大きな鉄の扉があつた。ブザーを押すとがつしりとした体格の守衛が出てきて、相手が専務であることを確認してから扉の鍵を開けた。なかなか嚴重な警戒である。

「この中にとんがり鴉さまがいらつしやいます」と専務が言つた。「とんがり鴉というのは昔々からとんがり焼だけを食して生きておる特殊な鴉の一族でありまして……」

それ以上の説明は不要だつた。部屋の中には百羽以上の数の鴉がいた。高さ五メートルくらいのがらんとした倉庫みたいな部屋に何本もの横棒が渡され、そこにとんがり鴉がずらりと並んで座つていた。とんがり鴉は普通の鴉よりずっと大きく、大きなもので体長一メートルくらいあつた。小さいものでも六十センチくらいはある。よく見ると彼らには目がなかつた。目のあるべき場所には白い脂肪のかたまりがくつついてるだけだ。おまけに体ははちきれんばかりにむくんでる。

僕たちが中に入った音を聞きつけるととんがり鴉たちはばたばたと羽ばたきをしながら一斉に何かを叫びはじめた。最初のうちはただの轟音にしか聞こえなかつたが、やがて耳が馴れてくると彼らがみんな「とんがり焼・とんがり焼」と叫んでるらしいことがわかつた。見るからにおぞましい動物だ。

専務が手に持つていた箱の中らとんがり焼を出して床に撒くと、百羽のとんがり鴉たちが一斉にそれにとびかかつた。そしてとんがり焼を求めて互いの足にくらいつき、目をつつきあつた。やれやれ、**これじゃたしかに**目が失くなつてしまふわけだ。

その次に専務はさつきとは違うべつの箱から、とんがり焼に似た菓子をとりだしてばらばらと床に撒いた。「よござんすか、これはとんがり焼コンクールで落選したものです」

135

鴉たちは前と同じようにそれに群がつたが、それがとんがり焼でないことがわかるとそれを吐き捨て、口ぐちに怒りの声をあげた。

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

と彼らは大声で叫んだ。その声が天井に反響して、耳の奥が痛くなるほどだつた。

「ほらね、本物のとんがり焼しか食べないんです」と得意

そうに言つた。「偽**もの**物だと口もつけません」

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

「じゃ、こんどはあなたのお作りになつた新とんがり焼を撒いてみましょう。食べれば入選、食べなければ落選です」

大丈夫かな、と僕は不安になつた。なんだかすくなく吉な予感がしたからだ。だいたいこんないい加減な連中に食べさせてみて当落を決めるなんて間違つてゐる。しかし専務は僕の思**わく**惑にはおかまひなしに、僕が応募した「新とんがり焼」を景気よく床に撒いた。鴉たちはまたそれに群がつた。それから混乱が始まつた。ある鴉は満足してそれを食べ、ある鴉はそれを吐き出してとんがり焼！とどなつた。次にそれにあることができなかつた鴉が興奮して、それを食べた鴉の喉笛をくちばしで突いた。血が飛び散つた。べつの鴉が誰かが吐き出した菓子にとびついたが、とんがり焼！と叫んでいた巨大な鴉に捕まつて腹を裂かれた。そんな具合に乱闘が始まつた。血が血を呼び、憎しみが憎しみを呼んだ。たかが菓子**136**のことなのだけれど、鴉たちにとってはそれが全てなのだ。それがとんがり焼であるか非とんがり焼であるか、それだけが生存をかけた問題なのだ。

「ほらごらんなさい」と僕は専務に言つた。「急にあんなに撒いちやうものだから刺激が強すぎたんですよ」

それから僕は一人で部屋を出て、エレベーターで下に降り、とんがり製菓の建物を出た。賞金の二百万円は惜しかつたけれど、この先の長い人生をあんな鴉たちの相手をしてながら生きていくなんてまっぴらだ。

僕は自分の食べたいものだけを作って、自分で食べる。鴉なんかお互いにつつきあつて死んでしまえばいいんだ。

とんがり焼の盛衰

村上 春樹

143

ぼんやりと朝の新聞を眺めていたら、隅の方に「名菓とんがり焼・新製品募集・大説明会」という広告が載っていた。とんがり焼っていったい何のことなのかよくわからない。でも名菓とあるからにはやはり菓子なのだろう。僕は菓子についてはちよつとうるさい方である。それに暇だったから、とにかくその「大説明会」というのに顔を出してみることにした。

「大説明会」はホテルの広間で催され、お茶と菓子までついていた。菓子はもちろんとんがり焼である。僕はひとつまんでみたが、とくに感心する味ではなかった。甘さの質がねちねちとしていて、かわの部分もつさりとしすぎている。今の若い人間がこんなものを好んで食べるとはとても思えない。

でも説明会に来ていたのは僕と同じくらいか、あるいはもっと年下の若い人ばかりだった。僕は952番という番号札をもらったが、まだあとから百人くらいは来たから、だいたい千人以上の人間がこの説明会に来たことになる。たいしたものだ。

僕の隣には二十歳くらいの度の強い眼鏡をかけた女の子が座っていた。美144人ではないが、わりに性格の良さそうな女の子だ。

「ねえ、君はこれまでにとんがり焼って食べたことあった？」と僕は訊ねてみた。

「あたりまえじゃない」と女の子は言った。「だって有名ですもの」

「でもそんなに美味く……」と僕が言いかけたところで彼女が僕の足を蹴とばした。まわりの人間が僕の方をじろりと見た。嫌な雰囲気だ。でも僕は「熊のプー」のような無邪気な目をしてその場をやりすぎた。

「あなたってバカねえ」と少しあとで女の子がそつと耳うちした。「ここに来てとんがり焼の悪口なんか言ったら、とんがり鴉がやにつかまって生きては帰れないんだから」

「とんがり鴉？」と僕はびつくりして叫んだ。「とんがり鴉って……」

「し——っ」と女の子が言った。説明会が始まった。

説明会ではまず「とんがり製菓」の社長がとんがり焼の歴史について話した。平安時代に誰が何をしてこうなったのがとんがり焼の原型であるとかいった類の真偽不明の話だ。古今和歌集にもとんがり焼についての和歌が入っているということである。おかしいから笑おうかとも思ったが、

まわりの人間はみんな真剣そうな顔で聞き入っていたし、とんがり鴉もこわいので結局笑わな145かった。

社長の説明はまる一時間つづいた。すごく退屈だった。彼の言いたいことは要するに「とんがり焼は伝統のある菓子である」というだけのことなのだ。そんなの一行で済む。

それから専務が出てきて、とんがり焼新製品募集についての説明を行なった。長い歴史を誇る国民名菓とんがり焼もそれぞれの時代に即した新しい血を入れて弁証法的に発展していかねばならないとかいった説明だ。そういうと聞こえはいいが、要するにとんがり焼の味が古くさくなって売上げが落ちてきたので若い人のアイデアが欲しいということである。それならそうとはつきり言えはいいのだ。

帰りに募集要項をもらった。とんがり焼をベースにした菓子を作って1カ月後に持参すること、賞金は二百万円、とある。二百万円あれば恋人と結婚して、新しいアパートに移ることが出来る。それで僕は新とんがり焼を作ることにした。

前にも言ったように、僕は菓子についてはちよつとうるさい。あんこやクリームやパイのかわなんか、どんな風にも作ることができる。一カ月で新しい現代的なとんがり焼を作り出すくらい簡単である。僕はメ切の日に新とんがり焼146焼をニダース作り、とんがり製菓の受付に持っていた。

「おいしそうねえ」と受付の女の子が言った。

「おいしいよ」と僕は言った。

*

その一カ月後にとんがり製菓から明日会社においてほしいという電話がかかってきた。僕はネクタイをしめてとんがり製菓にでかけた。そして応接室で専務と話をした。

「あなたの応募された新とんがり焼は社内でもなかなか好評であります」と専務が言った。「なかでも、あ——、若い層に評判がよろしい」

「それはどうも」と僕は言った。

「しかし一方でですな、ん——、年配のものの中には、これではとんがり焼ではないと申すものもおりましてですな、ま、甲論乙駁という状況でありますな」

「はあ」と僕は言った。いったい何か言いたいのかさっぱりわからない。

「で、この際とんがり鴉さまの御意見をうかがおうではないかと、重役会議で決定致しましたのであります」147

「とんがり鴉！」と僕は言った。「とんがり鴉というのはいったい何のことでしょうか？」

専務はわけがわからないといった顔をして僕を見た。「あなたとはとんがり鴉さまのことも知らずに、このコンクール

に応募されたのですか？」

「申しわけありません。どうも世事に疎いもので」

「困りましたな」と言つて専務は首を振った。「とんがり鴉さまのことも御存知ないというのは。……でも、ま、よろしゅうござんす。私のあとについていらつしやい」

僕は彼の後について部屋を出て、廊下を歩き、エレベーターで六階に上り、それからまた廊下を歩いた。廊下のつきあたりには大きな鉄の扉があった。ブザーを押すとがしりとした体格の守衛が出てきて、相手が専務であることを確認してから扉の鍵を開けた。なかなか厳重な警戒である。

「この中にとんがり鴉さまがいらつしやいます」と専務が言った。「とんがり鴉というのは昔々からとんがり焼だけを食して生きておる特殊な鴉の一族でありまして……」

それ以上の説明は不要だった。部屋の中には百羽以上の数の鴉がいた。高さ五メートルくらいののがらんとした倉庫みたいな部屋に何本もの横棒が渡され、**148**そこにとんがり鴉がずらりと並んで座っていた。とんがり鴉は普通の鴉よりずっと大きく、大きなもので体長一メートルくらいあった。小さいものでも六十センチくらいはある。よく見ると彼らには目がなかった。目のあるべき場所には白い脂肪のかたまりがくっついていてただけだ。おまけに体ははちきれんばかりにむくんでいる。

僕たちが中に入った音を聞きつけるととんがり鴉たちはばたばたと羽ばたきをしながら一斉に何かを叫びはじめた。最初のうちはただの轟音にしか聞こえなかったが、やがて耳が馴れてくると彼らがみんな「とんがり焼・とんがり焼」と叫んでいるらしいことがわかった。見るからにおぞましい動物だ。

専務が手に持っていた箱の中からとんがり焼を出して床に撒くと、百羽のとんがり鴉たちが一斉にそれにとびかかった。そしてとんがり焼を求めて互いの足にくらいつき、目をつつきあった。やれやれ、目が失くなってしまいうわけだ。

その次に専務はさつきとは違うべつの箱から、とんがり焼に似た菓子を取りだしてばらばらと床に撒いた。「よござんすか、これはとんがり焼コンクールで落選したものです」鴉たちは前と同じようにそれに群がったが、それがとんがり焼でないことが**149**わかるとそれを吐き捨て、口ぐちに怒りの声をあげた。

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

と彼らは大声で叫んだ。その声が天井に反響して、耳の奥が痛くなるほどだった。

「ほらね、本物のとんがり焼しか食べないんです」と得意そうに言った。「偽ものだと口もつけないんです」

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

「じゃ、こんどはあなたのお作りになった新とんがり焼を撒いてみましょう。食べれば入選、食べなければ落選です」

大丈夫かな、と僕は不安になった。なんだかすこく不吉な予感がしたからだ。だいたいこんないい加減な連中に食べさせてみて当落を決めるなんて間違っている。しかし専務は僕の思わくにはおかまいなしに、僕が応募した「新とんがり焼」を景気よく床に撒いた。鴉たちはまたそれに群がった。それから**150**混乱が始まった。ある鴉は満足してそれを食べ、ある鴉はそれを吐き出して**とんがり焼！**とどなった。次にそれにありつくことができなかつた鴉が興奮して、それを食べた鴉の喉笛をくちばしで突いた。血が飛び散った。べつの鴉が誰かが吐き出した菓子にとびついたが、**とんがり焼！**と叫んでいた巨大な鴉に捕まって腹を裂かれた。そんな真面目に乱闘が始まった。血が血を呼び、憎しみが憎しみを呼んだ。たかが菓子のことなのだけれど、鴉たちにとってはそれが全てなのだ。それがとんがり焼であるか非とんがり焼であるか、それだけが生存をかけた問題なのだ。

「ほらごらんさい」と僕は専務に言った。「急にあんなに撒いちやうものだから刺激が強すぎたんですよ」

それから僕は一人で部屋を出て、エレベーターで下に降り、とんがり製菓の建物を出た。賞金の二百万円は惜しかったけれど、この先の長い人生をあんな鴉たちの相手をしてながら生きていくなんてまっぴらだ。

僕は自分の食べたいものだけを作って、自分で食べる。鴉なんかお互いにつつきあつて死んでしまえばいいんだ。